
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 394 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2016.12.20（火）発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

*****発行部数 980 部*****

□ 目次 □-----

<巻頭言> 『エントロピーの法則』と福島第一原発事故 益永八尋

<お知らせ 1>

第 156 回定例研究会（予告）＝震災・水害と自治・地域住民及び水文化

<お知らせ 2> 山崎農業研究所所報『耕 No.139』発行されました

<お知らせ 3> 第 155 回定例（現地）研究会＝玉川上水を巡る

<編集後記> いまだからこそ「農の原理」を考えたい

—明峯哲夫著『有機農業・自然農法の技術』（コモンズ、2015 年）

<巻頭言> 『エントロピーの法則』と福島第一原発事故

『エントロピーの法則—21 世紀文明観の基礎』（ジェレミー・リフキン著、
竹内均訳、1982 年 12 月発行）を再読している。32 年前に発行されたものだが、
平易で読みやすい文明論の本である。今、この本を再び読み返すなかで、原発
に関する記述があったので、その基本的問題について考えてみた。

この本の 3 章、「テクノロジーの実体を明かす」に『原子力発電所の現状と
将来性、崩壊した安価なエネルギー神話』の話がある。ここで、原発は、決して
安価なエネルギーでないことが詳述され、「いわゆる隠れた費用が多く、
“安価なエネルギー”という原子力エネルギーの神話はもろくも崩れさってし
まった」と指摘している。さらに、「誰にもわからない核廃棄物の処理法」と
いうことにも触れ、原発にはこのような基本的な問題があることが指摘されて
いる。

つまり、今重要なことは、人間にとって安全に処理（分解、再利用等）でき
ないものは作ってはならないことだ。これが許容できるのは、安全という共通
認識が多数を占めた時であると思う。

この『エントロピーの法則』の本には、原発事故に関する記述はないが、一旦犯した失敗は不可逆で、決して徒（ただ）では済まされるものでないこと、そして必ずいつかは起こる事故を考えると、原発を「安価なエネルギー」とする理由には全く根拠がないことが分かる。この本に従えば、原発は人類にとって何のメリットもないことになる。

2011年3月11日に発生した宮城県沖を震源とする地震による津波により福島第一原発の事故が発生した。この原発事故により、原発周辺に住んでいた多くの住民は被災してから5年がたった現在でも故郷に戻れない避難生活を余儀なくされている。

わが国には32年前（1984年）には、27基しか原発は運転されていなかったが、当時、福島第一、第二発電所はすでに運転されていた。現在では51基（廃炉予定を含む）だから、32年前から24基増加している。1966年（最初の原発が運転された年）から1984年12月までの原発増加率は1年あたり1.42基だが、それが1985～1997年では1.85となり原発建設がスピードアップしている。

原発事故が発生し、原発の廃炉作業計画は策定されたが、その計画自体も絵に描いた餅になりつつあるだけでなく、後処理に巨額な金がかかるだけでなく、廃炉作業の国民負担もさらに増加することが明らかになっている。

こうした事態にも関わらず、原発の再稼働や原発輸出を安倍内閣は推進している。東京電力で発生した事故（東京電力が起こした事故ともいえる部分がある＝裁判中）であるにも関わらずである。このような政府に日本の未来を託すことは、自分の首を絞めることに他ならない。

わきまのない、身勝手な「安倍政治は許せない」という気持が、この本によって、ますます強まった。同時に、多数の声が正しく反映される選挙制度が構築されなければ、国民の多数の声は政治的には反映されない。そればかりではない。悪政を黙認することにもなる。来年はこんな暴走政治をさせない年にしたいと思う。

益永八尋

山崎農業研究所幹事

yamazaki@yamazaki-i.org

<お知らせ 1>

第 156 回定例研究会（予告）＝震災・水害と自治・地域住民及び水文化

次回（02/04）の定例研究会のテーマは「震災・水害と自治・地域住民及び水文化」です。近年、地震や風水害が頻発していますが、自然災害は単なる自然現象でなく、人間と自然と関係によってその被害の大きさが決まるといえます。ハード技術に偏重するのではなく、地域住民の自主的防災の考え方もふまえたソフト防災も重要ではないか。そして、そもそもの「水」と「土」の文化論的検討が必要ではないか。そんな観点からの研究会です。みなさまの参加をお待ちしております。

1、日時：2017年2月4日（土）13：15～17：00

2、研究会会場：NTC コンサルタンツ会議室

東京都中野区本町1丁目32番2号ハーモニータワー20階

3、参加費：500円（資料代）

4、講演：13：20～17：00

(1)大熊 孝 氏（新潟大学名誉教授）

「技術にも自治がある―日本人の伝統的自然観と水防技術」

(2)大橋 欣治 氏（元農水省北陸農政局長）

『水と土の文化論』をめぐって」（仮題）

5、懇親会 参加費：4000円

※参加申し込み：参加希望者は下記へご連絡下さい。

TEL：080-2061-4227（益永携帯）e-Mail：y.masunaga@ntc-c.co.jp

<お知らせ 2> 山崎農業研究所所報『耕 No.139』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.139』が発行されました。

ご希望の方には雑誌を頒布いたします。

yamazaki@yamazaki-i.org

までご連絡ください。

《土と太陽と》(巻頭言)

いまなぜベーシックインカムか

—これからの「百姓的」生き方を支える政策提言◎白崎一裕

[第 154 回定例研究会]

グローバル化から「農本化」としてのローカリゼーションへ◎関 曠野

[第 42 回研究所総会・第 40 回山崎記念農業賞]

総会挨拶◎小泉浩郎

第 40 回山崎記念農業賞贈呈式(栃木県益子町・(株)川田農園)

選考委員報告◎渡邊 博

お祝いの言葉◎加藤敏之／松本 謙

受賞者挨拶◎川田 修

■総会記念フォーラム:

「こだわり」で結び合う農と食—農園と厨房をつなぐ川田農園の挑戦

I 解題: 川田農園が教える食と流通◎小泉浩郎

II 我が国における有機農業の動向◎家常 高

III 栃木県の 6 次産業化振興と川田農園の特徴◎小林俊夫

IV 「農園」から「厨房」まで◎川田 修

参加者の声◎若林祥子／内田空美子／丸山紀之／堀 泰史

[特別対談]

川田農園の今と明日を語る◎松本 謙×小泉浩郎

〈連載〉“生きもの語り”の世界から(10)

なぜ日本人は、「天地自然」に惹かれるのか／宇根 豊

<お知らせ 3> 第 155 回定例(現地)研究会=玉川上水を巡る

昨年、山崎農業研究所の安富六郎前所長が『武蔵野・江戸を潤した多摩川—多摩川・上水徒歩思考』を出版されたこともあり、農業土木との関係が深い武蔵野台地用水、江戸町生活支えた玉川上水を訪ねての現地研究を 10 月 29 日に開催しました。現地見学に先立ち、羽村郷土歴史館に隣接する市の集会場、「清流

会館」で安富前所長から1時間ほど話題提供していただき、午後からマイクロバスに乗って、いくつかの地点を見学しました。

当日の行程は以下のとおりです

11:00～12:30 安富前所長の講演と意見交流：羽村市清流会館→
12:40～13:10 羽村堰見学→13:10～13:30 羽用水（車窓）→
14:30～14:50 府中用水堰（青柳）→中用水堰（青柳）→
15:30～16:00 野火止用水分堰→16:40 千川上水分点（車窓）→
17:00～17:10 三鷹～井の頭公園間の玉川上水（車窓）→
公園間の玉川上水（車窓）→17:30～19:30 懇親会

安富六郎著『武蔵野・江戸を潤した多摩川——多摩川・上水徒歩思考』
（農文協、199ページ、定価1700円〈税別〉）

www.amazon.co.jp/dp/4540142631

<編集後記> いまだからこそ「農の原理」を考えたい
——明峯哲夫著『有機農業・自然農法の技術』（コモンズ、2015年）

本書は、2014年9月に急逝された農業生物学者・明峯哲夫氏の最後の著作である。亡くなる年の5月から8月にかけて行なわれた秀明自然農法農学セミナーでの講演記録を中心に、盟友である三浦和彦氏と中島紀一氏によってとりまとめられた。

本書で繰り返し出てくる言葉に「原理」がある。

「第1章 植物成長の原理——植物が植物を育てる」の冒頭こう書かれている。

「本書では、植物生育の中心原理、その核心について、『植物は自然に育つ』『植物を育てるのは植物だ』『その秘密は土中の有機炭素蓄積にある』という考え方の基本について説明します。これから述べることは、ぼくが到達した、ぼく独自のセオリーです」

このように、のっけから「原理」という言葉が出てくる。そして随所に「原理」「原則」「基本原理」という言葉が使われている。

植物は空中窒素（窒素ガス）を直接利用できない。一方、土中のある種の微生物は窒素ガスをアンモニアに変換する能力をもっている。そして微生物は植物の遺体である有機物を分解しエネルギーを引き出す。

「原理的にみれば、植物による炭素同化（光合成）と微生物による窒素固定によって、陸上の生物の世界がつくられてきたのである」

つまり、植物は微生物を必要とし、微生物は植物を必要とするのである。

有機農業・自然農法に取り組んでいる人であれば、こういった自然界の原理と自分たちの農法が通じあうことに気づくだろう。草を邪魔者にしない農法、輪作を大事にする農法、そうやって土中炭素をふやす農法……。

農作物も植物であり自然である。そんな当たり前のことを本書を読むと意識させられる。植物はそもそも人間のために生まれてきたものではない。だからこそ人間は自然のなかの農作物＝植物の生命のうごき（そのサイクル）に関心をはらい、この自然の摂理に反しないように長い年月をかけて土づくりや育種に取り組んできた。

一方、人間はさまざまな科学技術によって人間の論理（とくに近年では経済の論理）に農作物＝植物を合わせようとし、その目的を相当程度実現してきた。しかしその裏返しとして、自然の摂理への配慮がうすくなっているようにも思う。

TPP はどうやら破綻しそうだけれども、もしかしたら日米 FTA というよりハードな条約を日本は求められるのかもしれない。それは農業がより経済に振り回される時代が来るかもしれないということである。しかし、農作物は植物であり自然の存在である。人間の論理、経済の論理がとかく優先される時代だからこそ、農を原理的に追究しようとする本書は一人でも多くの人に手にとってほしいと思う。

明峯哲夫著

『有機農業・自然農法の技術
—農業生物学者からの提言』

出版社: コモンズ

言語: 日本語

ISBN-13: 978-4861871214

発売日: 2015/2/7

http://www.commonsonline.co.jp/yuuki_sizen.html

2016年12月19日

山崎農業研究所会員・田口 均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売

『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

(発売: 2008/11 定価: 1,575円)

http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/

たくさんのお書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん (文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授)

グローバルの次は何? ~卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん (大地を守る会)

ブログ: 大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん (長野県農業大学校教授、執筆者)

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん (拓殖大学政経学部)

ブログ: 代替案 書評: 『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん (イラストレーター・ライター)

ブログ: 囲炉裏暖炉のある家 tortoise+lotus studio 「書評『自給再考』

<http://iroridanro.net/?p=15533>

◎ブログ: 本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rircl.jp/shiryo.htm>

◎日本農業新聞／書評

(2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優)

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎小谷敏さん (大妻女子大学)

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ (2009/01/31)

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん ((株) 共に生きるために)

月刊とちぎV ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎塩見直紀さん (半農半X 研究所、執筆者)

ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！

立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

http://www.csj.jp/learned-society/check/new_but/jisx0208-sjis.html

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回 395 号の締め切りは 01 月 09 日、発行は 01 月 11 日の予定です。

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 394 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2016.12.19（月）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

***** ここまで『電子耕』 *****